

歴史散策

高家の町並みとおひなさん ～阿下喜を歩く～

【日 時】平成30年3月4日(日) 9時から12時

【集合場所】三岐鉄道北勢線 阿下喜駅前

解説:ふるさといなべ市の語り部

【コース】全行程 約3.0Km

阿下喜駅 ⇒ 軽便鉄道博物館 ⇒ 目の地蔵 ⇒ 西念寺 ⇒ 市神さん ⇒ 間歩(マンボ)
⇒ 西町通り ⇒ 大西神社 ⇒ 北町通り ⇒ まちかど博物館(プチ鉄道博物館) ⇒
相願寺 ⇒ 桐林館 ⇒ 桐林館にて「はなもも会」より「あげきのおひなさん」の解説【解散】

主催：三重県 後援：いなべ市・いなべ市教育委員会・三岐鉄道株式会社

協力：ふるさといなべ市の語り部

阿下喜の由来

阿下喜は「上木」ともいわれるが、「阿下喜根元記」によれば、この辺りには檜の大木が生い茂っていたので、それを御用木に上たからとも上木が出たからともいわれる。

また、鶯の名鳥を局より内裏へ差し上げたところ喜ばれ、年貢を三分の一に減らされたので阿く下に喜んだから阿下喜といったともいう。とある。しかし日本に漢字が入ってきた頃より昔、縄文弥生時代にすでに阿下喜に人が住んでいたのであるから、その頃の人々が、くぼ(低いところ)に対しての高い所をいう「あげ」と小高いところを築くことから、小高い所という意のある「き」から「あげき」とよんでいたのではなかろうか。

(いなべ市商工観光課作成 「阿下喜」より)

鉄道が阿下喜へ来る

狭い軌道の上を小さな客車をひっぱって走る小さな蒸気機関車は「北勢鉄道線路沿線名勝案内記」で「従来員弁郡の地は交通不便の為め県下の北海道と目されたりき、然れど本鉄道の開通に依りて郡の中央を串通するを得ば交通運搬の利を得るのみならず、四時風光を探じるの人士の便亦尠からずと云うべし」といっているように員弁の人々の目を外へむけた。人々は軽便といい、大正から昭和にかけて阿下喜の人々の桑名への唯一の足として親しまれた。

(いなべ市商工観光課作成 「阿下喜」より)

◆ 軽便鉄道博物館

大正から昭和初期にかけて全国で300路線敷かれた軽便鉄道。線路幅が762ミリとJR在来線の1067ミリより狭いナローゲージで、走る電車も通常より小さい。桑名と阿下喜間の20キロを結ぶ三岐鉄道北勢線は、現在全国でわずか3路線しか残っていないナローゲージの路線だ。

阿下喜駅の隣にある「軽便鉄道博物館」は、北勢軽便鉄道から始まった

北勢線について、多彩な写真やミニチュア模型などの資料を展示している。さらに昭和6年当時の車両に乗れたり、ミニ電車に乗って周回できたりと、大人から子どもまで楽しめる。

博物館は車庫を兼ねており2つの軌道が伸びている。一つは北勢線と同じ線路幅で、その先には昭和6年に鉄道が電化されたときに作られ、昭和58年まで走っていた「モニ226号車」が当初の姿に復元されて展示されている。もう一つの軌道は線路幅がさらに半分の381ミリ、全長180メートルの周回コース。3両編成の黄色いミニ電車は切符不要だ。さっそくガリバーになったような気分で乗車。風を感じながらガタンゴトンと進んでいくと、かつて使われていたターンテーブルや信号機なども現れ、軽便鉄道の雰囲気を楽しめる。



この博物館を運営しているのは、「ASITA(北勢線とまち育みを考える会)」。北勢線の存廃問題が持ち上がったとき、存続運動をした住民たちを中心に結成された。運動が実り北勢線の存続が決まった後、鉄道を生かしたまちづくりを行政や鉄道事業者と一体となって考えた中で、軽便鉄道の魅力を発信する博物館を提案したという。毎月第1・第3日曜日(1月は第2・第3日曜日)10時~16時に開館
(伊勢文化舎発行「三重のまちかど博物館に行こう!」より抜粋)

◆ 目の地蔵

自噴の井戸水で目を洗うと目の病気が治るといわれるがあります。

(いなべ市商工観光課作成「阿下喜」より)



◆ 西念寺

向日山と号する浄土真宗本願寺派のお寺で、本尊は阿弥陀如来。開基は紀州雑賀衆の山北豊後守教尊という人が織田信長と石山本願寺の争乱の際、丹生川上村に来て住み着き、小さな庵を建て正法寺と称し菩提寺としたところから始まる。天正の争乱ののち教尊は出家して正法寺の僧となり、のち堂を阿下喜に移して寛永年間に現在の寺号に改めた。

西念寺という名前のお寺は本願寺派のお寺15,000カ寺のうち48カ寺ある。最も多い寺号は光明寺の60カ寺で、それに次いで多い寺号である。西念寺という名前は親鸞聖人が京都で成仏される時に身近で最後までお世話をしていた僧が伊勢の西念坊という僧であったのにちなみ、親鸞聖人の教えを守り広めて行くというところから付けられたとされる。

(北勢線の魅力を探る会発行「第21回北勢線の魅力を探る 報告書」より抜粋)



◆ 市神さん

古来より、阿下喜は人の集まる所、農産物の集散地であり、定期市が開かれた。初めは月3回であったものが、商品流通の発展とともに5日おきの月6回、いわゆる六斎日市になった。(北勢町史より)その市の発展を願って建てられたようです。

(いなべ市商工観光課作成「阿下喜」より)



◆ 間歩(マンボ)

江戸時代、水不足に悩む農民が湧き水に目をつけ、小さい崖下からほっていったのが地下水路の間歩(マンボ)です。阿下喜には複数あるようです。 (いなべ市商工観光課作成「阿下喜」より)

◆ 大西神社

阿下喜の集落の最も西側に鎮座する神社で、大国主神の子である建御名方神を主祭神とし、同じく大国主神の娘である下照姫命を祀ります。また、大山祇神・誉田別命・火産靈神・須佐之男命・石神が合祀によって加えられ、合わせて7柱を祭神としています。上木(阿下喜)城主片山大和守(主計頭・平三とも)信保が、長野県の諏訪湖畔に鎮座する諏訪大社(上社本宮は諏訪市、上社前宮は茅野市、下社秋宮・春宮は諏訪郡下諏訪町に鎮座)を分祀したことにはじまり、その創祀年代は葉「大西神社」では弘治年間(1555~1558)と推定しています。



一方で「神社の川流れ」という創祀に関する伝承が『北勢町風土記 資料第一集』に記載されています。それによれば北勢町川原の丸山神社の前身にあたる祠が水害による崖崩れで流失し、阿下喜の水田で発見されました。これを機に阿下喜にも分祀されて大西神社と称したといえます。伝承によれば大西神社の社号は川原に多い大西姓に因むそうです。

創祀以降、長らくは諏訪大明神と称されていましたが、天保7年(1836)8月14日に社号を大西神社と改めました。この際に下された文書の写しが社務所に掲げられており、神道を司る堂上公家吉田家の当主吉田良長(1792~1840)の名が認められています。これが契機となって天保11年(1840)8月には京都府京都市左京区に鎮座し、吉田家が神職を代々継承している吉田神社の修築に際して金200疋を寄付しています。

(北勢線の魅力を探る会発行「第21回北勢線の魅力を探る 報告書」より抜粋)

◆ まちかど博物館 (プチ鉄道博物館)

北勢線の廃線問題の資料、鉄道模型や切符・写真などを展示。「北勢線を活かしたまちづくり」活動の拠点にしていきたい。

(いなべまちかど博物館 散策マップより)



◆ 仏生山 相願寺

仏生山相願寺は天文年間(1532～1554)に創建され、当初は天台宗で開基は僧法正(ほうしやう)と言われたそうである。貞享年間に真宗に改宗されたようである。

阿下喜は永禄年間の織田信長の伊勢侵攻で焼かれ、さらに江戸時代に3度の大火にみまわれた。特に文化5年(1808)の大火は「阿下喜は酒屋以外全部焼けた」という猛火だったそうで、相願寺も焼けたと思われる。そして寺の什器も寺宝も焼失したようで、古いことはほとんどわからないようである。現在の本堂は明治29年に再建されたものである。



明治期後半に当時被差別部落と差別を受けてこられた人たちが、この寺の門徒になりたいと願い出て来られました。以前からの門徒さんの中には当時の厳しい差別意識が根強くある中で、不賛成の方もいましたが、時の住職が「仏の前ではすべての人は平等である。」と熱心に説かれ、不賛成の方々も受け入れに同意され、現在ではお寺を支え、活動を支えておられるという事です。

(北勢線の魅力を探る会発行「第21回北勢線の魅力を探る 報告書」より抜粋)

◆ 桐林館(国の登録有形文化財)

桐林館(旧阿下喜小学校校舎)は、2014年に校門、および石柵と共に国の有形文化財に登録された。校舎は阿下喜町の尋常高等小学校校舎として1937年に建てられた。

校舎の屋根の真ん中にある小さな塔、左右の三角形の屋根窓や玄関ポーチが特徴的である。内部では校長室の格天井、腰板、職員室の書架など木造建築の良さと美しさが見られる。1947年～1959年に当時の大和中学校が使用していたが、1960年から再度阿下喜小学校として使用された。1980年に現在の小学校校舎が、鳥坂野に新築されたため、本校舎は取り壊されることになったが、校区民の要望により、玄関、校長室、職員室、家庭室が保存された。校舎の周りに多くの桐の木が植えられていて「桐の学校」と言われていた。校門、石柵も当時のまま残されている。現在は郷土資料館として、使命を果たし公開されている。



(いなべ市観光協会発行「ふるさとの紹介」より)

事務局

〒511-8567 桑名市中央町5丁目71番地
三重県桑名地域防災総合事務所 歴史散策係
電話：0594-24-3821